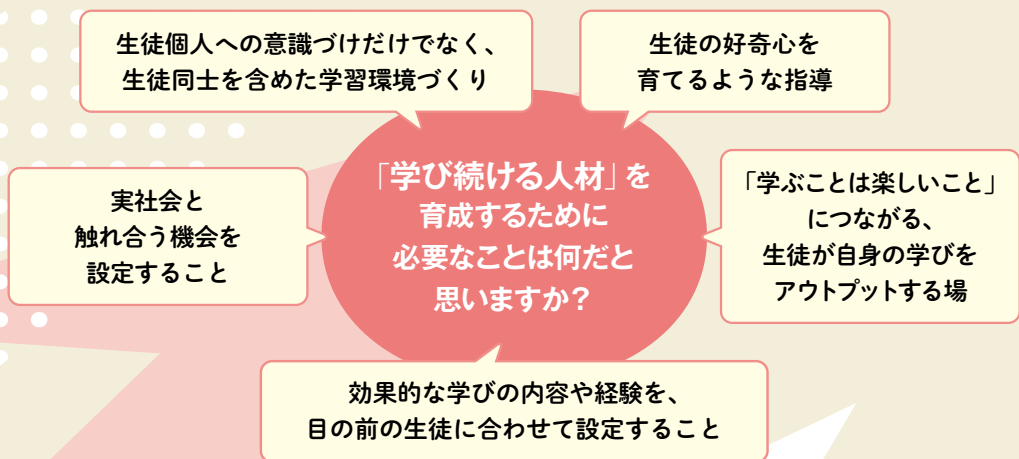


# の向上

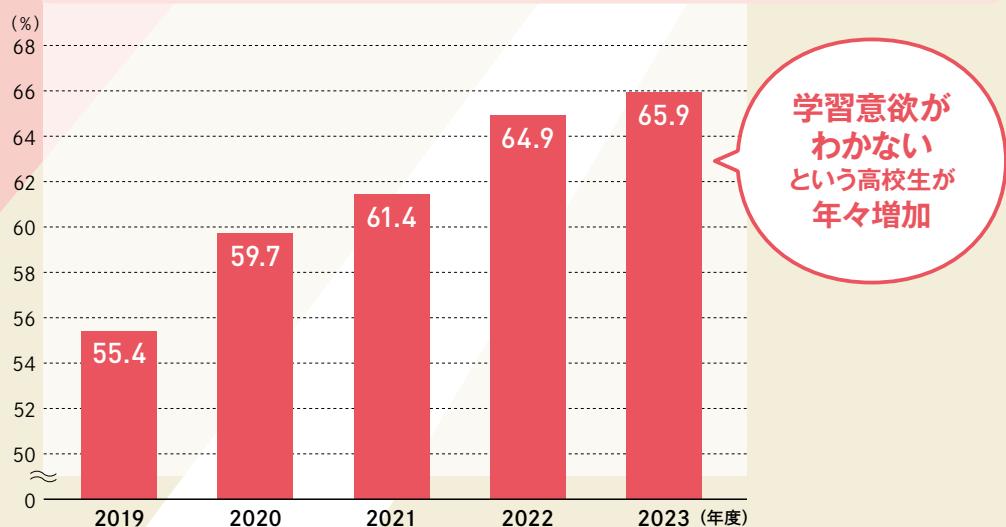
## をデザインする

図1 教師が考える「学び続ける人材」を育成するために必要なこと



※『VIEW next』高校版読者モニターへのアンケート結果（アンケートは、2023年10月にウェブとファクスで実施）を基に編集部で作成。

図2 「勉強しようという気持ちがわからない」の肯定率（高校生）



注) 数値は、「とてもあてはまる」+「まああてはまる」の%。

※東京大学社会科学研究所・ベネッセ教育総合研究所「子どもの生活と学びに関する親子調査 2023年」を基に編集部で作成。

特集

# 学習意欲

—— 学びの志向を捉えて教育活動

今年度の本誌6月号の創刊400号記念特集において、これからの学校教育の課題の1つとして取り上げた「学び続ける人材の育成」は、国の「第4期教育振興基本計画」の中でも、今後の教育政策に関する基本的な方針の1つに掲げられています。そして第4期計画では、「初等中等教育や高等教育において、学習内容を人生や社会の在り方と結び付けて深く理解することや、興味・関心を喚起する学びを提供することなどにより、学びを習慣化し、生涯にわたって能動的に学び続けるための態度を涵養することが重要である」と述べられています。

実際、現場の先生方も、学び続ける人材を育成するために、生徒に学びを提供するにあたり、様々な工夫をされていらっしゃる（図1）。一方で、高校生の学びに向かう意欲は年々低下しています（図2）。その要因は様々なものが考えられますが、今号の特集は「学びの志向」の面から、どうすれば生徒の学習意欲を向上させることができるのか、考えてまいります。まずは、生徒を学びに向かわせる教育活動をデザインし、実践している3校の事例から見ていきます。

VIEWnext 編集部 統括責任者 柏木 崇

P.4 **事例1** 宮城県岩ヶ崎高校

地域と協働した探究学習で、広い視野と挑戦する姿勢を育む

P.8 **事例2** 茨城県立並木中等教育学校

学年を超えて切磋琢磨する環境で、能動的に学ぶ生徒を育てる

P.12 **事例3** 徳島県立<sup>こまつしま</sup>小松島高校

こまめな生徒把握で学習イベントを修正。  
生徒が自ら選ぶ学びで意欲を向上

P.16 **事例を通して考える**

6つの志向を踏まえて、学びの動機づけをいかに図るか

東京大学名誉教授、東京都・私立帝京大学中学校・高校 校長 市川伸一

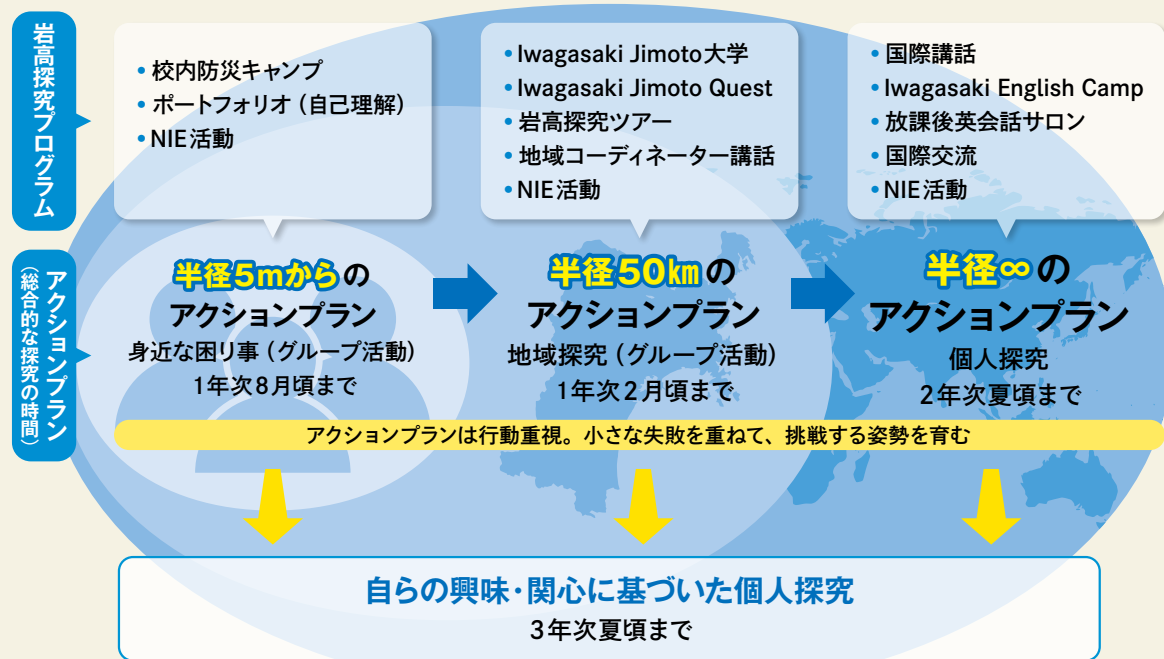
# 地域と協働した探究学習で、 広い視野と挑戦する姿勢を育む

希望進路は地元志向でも、地域や社会に対する関心が低い生徒が少なくなかった宮城県岩ヶ崎高校。そこで2023年度、生徒の目が地域や社会に向くよう、地域と協働した探究学習や課外活動を導入した。生徒の意欲を喚起するべく、身の回りの課題からスタートし、行動範囲を徐々に広げるカリキュラムとしている。

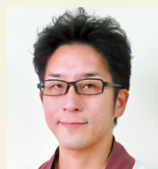
実践の全体像

## 生徒に自信を育む「岩高探究プロジェクト」

地域との協働を中心とした様々な「岩高探究プログラム」で視野を広げながら、「総合的な探究の時間」において半径5m、半径50km、半径∞の「アクションプラン」に挑戦し、それらの経験を進路選択につなげている。



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



**三浦大樹**  
みつうら だいき  
地域コーディネーター  
同校に赴任して1年目。地元商店街の地域おこし協力隊。



**高橋翔平**  
たかはし しゅうへい  
進路指導部1学年探究担当  
同校に赴任して5年目。1学年担任。国語科。



**大沼宏多**  
おおぬま こうた  
進路指導部総合探究主任、2学年主任  
同校に赴任して3年目。英語科。



**千葉朋彦**  
ちば ともひこ  
進路指導部副部長  
同校に赴任して4年目。3学年担任。英語科。



**津渡香純**  
つくだ かずみ  
進路指導部部長  
同校に赴任して15年目。数学。

**学校概要**  
設立 1951 (昭和26) 年  
形態 全日制 / 普通科 / 共学  
生徒数 1学年約30人  
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、室蘭工業大、岩手大、福島大、釧路公立大、名寄市立大、青森県立保健大、青森公立大、宮城大、秋田県立大、高崎経済大に16人が合格。私立大は、東北学院大、東北福祉大、北里大、専修大、日本大、文教大などに延べ79人が合格。

# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

取り組みの背景・全体像

## 地元志向でも、地域への関心が低い生徒たち

宮城県岩手ヶ崎高校は2023年度、宮城県「地域進学重点校改革推進事業」の指定を受けて、地域と協働した「岩高探究プロジェクト」をスタートさせた。進路指導部部長の渡邊香純先生は、その背景を次のように語る。

「本校の生徒は、希望進路は地元志向ですが、入学時は地域や社会への関心が低く、学校の近くに全国から移住者が集まる六日町通り商店街があることも知りません。そこで、生徒が地域や社会に関心を持てるよう、地域のよさを生かした活動を行うことにしました。地元志向の生徒が地域の状況を知ること、将来像を具体的に描けるようになるのではないかと期待もありました」

同プロジェクトは、「総合的な探究の時間」(以下、総合探究)で行う「アクションプラン」と、様々な正課・正課外活動を行う「石高探究プログラム」の二本柱から成る(P.4図)。いずれも、自分の身の回りから地域、日本、そして世界へと、生徒が視野や行動の範囲を広げながら活動できるようにした。「生徒は失敗を恐れる傾向があった

ため、取り組みやすい身の回りの課題から始めることで、挑戦する意欲や行動力を育もうと考えました(渡邊先生)

意欲を喚起する「アクションプラン」

## 視野も関心も挑戦も、徐々に広がっていく

「アクションプラン」は、1年次1学期の「半径5mからのアクションプラン」から始まる(図1)。生徒は学校内や自分の関心から課題を見だし、個人かグループで探究する。23年度は、「校内の売店の誘致」「不要物の活用法」などの課題が設定された。1学年探究担当の高橋翔平先生は、こう語る。

「『アクション』を通じて、生徒に何かを立ち上げて行動する経験をしてほしいと思っています。チョークの再生に挑戦したチームに地域のイベントを紹介したところ、自分たちの経験を生かし、再生チョークのワークショップを設けました」

そのようにして生徒の意識を地域や社会に向けさせていき、1年次10月からは「半径50kmのアクションプラン」に、2年次からは「半径∞」として各自の関心に基づく個人探究に取り組む。

23年8月には、六日町通り商店街の地域おこし協力隊を務める三浦大樹さ

図1 「総合的な探究の時間」で行う「アクションプラン」の3年間の計画と、生徒のアクション(例)

	1年次	2年次	3年次
	地域探究 (社会の課題+行動する力)	自らの関心分野の探究 (社会の課題+学問分野)	
育てたい力	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題に対して前向きに向き合う姿勢の育成</li> <li>自分が持っているリソースにとらわれない思考</li> <li>失敗を前提に行動し、失敗から学ぶ</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会の課題に関心を持ち、その解決に向けて他者と協働しながら考え抜き、行動する力</li> <li>将来の目標を明確に設定し、目標達成に向けて粘り強く取り組む姿勢</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>社会の課題を主体的に捉え、その解決に向けて多角的な視野で考え、行動し続ける姿勢</li> <li>多様な情報を的確に把握し、他者との議論を通して自らの考えを深め、的確に表現する力</li> </ul>
4月		探究③ 個人探究Ⅰ	探究④ 個人探究Ⅱ続き
5月	探究① アクションプラン	(アクションを含む)	
6月	こうだったらいいな (Do)	半径∞の世界	まとめ 探究論文の作成
7月	半径5mから始まる世界		
8月		オープンキャンパスで研究室訪問	
9月	ポスターセッション		探究論文の提出
10月	探究② アクションプラン②	探究④ 個人探究Ⅱ	
11月	地域実践 (グループ)	(アクションを含む)	
12月	半径50kmで考える世界		
1月	地域で実現させたいものを企画		
2月	実践する (Do)		
3月	ポスターセッション	ポスターセッション (中間発表)	



▲「チョークの粉や短くなったチョークを活用できないか」という課題意識を持った生徒が、チョークの再生に挑戦。成功した生徒は、栗原市の「秋の花山フェスティバル」で、小中学生に作り方を教える講座を設けた。

### 「半径∞のアクションプラン」 ゴミを減らす循環型漁業を提案

漁業による海洋汚染を、エコな素材で解決する  
～LIMEX素材の漁具制作で世界規模での環境保全と産業発展～

**1 海洋汚染の課題発見**

漁具「まめ管」の課題  
- 環境問題  
- マイクロプラスチック  
- 生態系への影響

**2 素材決定**

解決に向けた素材「LIMEX」  
- まめ管への適正・環境への配慮  
課題「コストが高い」  
- 原料をなす状況から仕組みに変更  
- コストダウン・循環型漁業の実現

**3 試作実験**

企業、漁業者と連携し、まめ管の試作

実証実験でデータ収集  
改良、修正  
特許取得  
製品化

**4 実案**

全国の牡蠣産業者に営業、販売

マーケティングでシェア拡大  
まめ管以外の漁具の課題について調査

九州をはじめとする、各地の漁業による、海洋プラスチックゴミ問題に、事業を応用

**世界の海を綺麗にする**

▶牡蠣の養殖に使うポリエチレン製のまめ管が海に浮遊していると知った生徒が、牡蠣の殻をまめ管に活用することを提案。2023年度「高校生みんなの夢AWARD」で地球環境賞を受賞した。生徒は研究を深めようと、九州の公立大学への進学を決めた。

\*学校資料を基に編集部で作成。

んを「地域コーディネーター」として配置。週2日、進路指導室に在室し、生徒の探究学習の相談に乗っている。2年次の総合探究の授業に参加し、生徒の探究テーマの設定も支援した。

「地域おこし協力隊の活動をする中で、学校と地域の接点の少なさを感じていました。学校と地域の間立ち、学校の希望を地域に、地域の資源や課題を生徒に伝えることで、生徒の学びを深めていきたいと思っています」（三浦さん）

意欲を喚起する「岩高探究プログラム」

見せたいのは「挑戦する大人の姿」

「岩高探究プログラム」は、生徒の関心や視野を広げるための種まきとなるよう、地域と協働で多様な活動を行っている（図2）。例えば、「Iwagasaki Jimoto 大学」は年2回行う社会人講話で、地域で働く大人が個人・法人として挑戦していることを語る。

「大人たちは、与えられた仕事をただこなしているのではなく、それぞれ問題意識や目標を持ち、その解決や達成に向けて真剣に取り組んでいます。そうしたことを知ると同時に、実際に挑戦している大人の話聞くこと

で、問題解決や目標達成のためにはどのような行動をすればよいのか、そのヒントを生徒がつかめることをねらいとしています」（濟渡先生）

23年度の「岩高探究ツアー」では、東日本大震災で被災した気仙沼市や、学校が位置する栗原市に隣接する岩手県平泉町の世界遺産を訪れた。気仙沼市のツアーは、地域の課題である防災や減災について学ぼうと、震災遺構や復興の取り組みなどを見学し、地元の中高生の語り部から話を聞いた。生徒からは、「自分と同じ高校生や年下の中学生が震災の経験を語り継いでいて、自分も見習いたいと思った」といった声上がるなど、同年代の交流は生徒に大きな刺激を与えている。

生徒が主体的に取り組めるよう、大半のプログラムは参加自由だ。ただ、できるだけ多くの生徒に参加してもらいたいと、声かけを工夫していると、進路指導部副部長の千葉朋彦先生は語る。「参加者を募る際には、『歴史好き募集』などと限定せず、街づくり・観光・環境・教育などのキーワードを多く挙げて生徒に声をかけます。自分に関係があると思わせるのがポイントです」

参加を尻込みする生徒もいるが、「大丈夫、行ってごらん」と教師がさりげなく背中を押す。「生徒の挑戦を応援

図2 地域と協働した「岩高探究プログラム」(例)



「小児がん患者の現状を知ってほしい」と、地元の夜市でレモネードを販売



地元の日本語学校に通うネパール人留学生と英語で交流

**事業指定後、地域との協働を強化。生徒が地域をリアルに感じる活動を拡大**



地域から寄せられた課題に生徒が挑戦

▲郡部に位置する同校では、生徒が外国人と接する機会が少ない。そこで、英語漬けの日々を送る1泊2日のキャンプを実施。生徒26人、同校のALT、地元の日本語学校に通うネパール人留学生14人が参加。一緒に料理をしたり、ゲームをしたりしながら、英語で交流した。

▲美術部と有志の生徒が、小児がん患者を支援するための募金活動として、地元の夜市でレモネードを販売。参加者には、2年次の個人探究で「小児がんの治療薬の現状」「患者の栄養支援や看護」をテーマにした生徒もいる。

▶地域コーディネーターの三浦さんが、地域から寄せられた課題を進路指導室前に掲示。有志の生徒が課題に取り組む。ある店は、店内の一角をどうしたら近隣住民に利用してもらえるかを相談。生徒がPR動画を作成し、SNSで配信したところ、ワークショップに利用したいと申し出があった。

※学校資料を基に編集部で作成。

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

しつつ、寄り添い、支える距離感を心がけています」と津渡先生は語る。

意欲を喚起する「振り返りの仕組み」

### ストーリー機能で目標設定と振り返りのサイクルを確立

生徒が自分の成長を実感する機会となるよう活用しているのが、「Classi」(\*)のストーリー機能だ(図3)。生徒は、年度当初に自分の年間目標を設定。探究学習や課外活動、部活動などで自分が挑戦した内容や振り返りをストーリー機能に随時入力する。その上で、年4回の定期考査のタイミングで、蓄積した記録を振り返り、そこでの気づきを踏まえて目標を見直す(図4)。総合探究主任の大沼宏多先生は、ストーリー機能に活動を入力する生徒が年度当初より増えていると語る。

「その時に自分が何を思ったのか、どんな試行錯誤をしたのか、過去の自分と比較でき、自分の成長を実感できるからでしょう。自分の学びや経験を自分の言葉で記録したいという気持ちが生徒の芽生えるのだと思います」

ストーリー機能は生徒が入力したくなる書式だと、津渡先生は指摘する。

「ストーリー機能はページをまたがずに一覧になっているので、ひと目で

内容を把握することができます。ポラニアや資格取得など、活動ごとに入力欄があるので、空欄を埋めたいという欲求に駆られます。そうした動機で活動したとしても、活動する中で得られるものがあり、『これができた。次はあれをしよう』という好循環が生まれています」

取り組みの成果・展望

### 地域に自ら出て活動する生徒たち

様々なプログラムを始めてから、意欲的に挑戦する生徒が増えている。地域の中学生に黒板アートの講習会を開催したり、小児がん患者を支援するボランティア活動を行ったりするなど、探究学習での取り組みを発展させた新たな活動に取り組む生徒も少なくない。

生徒にアンケートを取ったところ、「社会の課題に対する関心が高まった」の肯定率が100%だった(図5)。模擬試験の成績も上昇傾向にあり、自己肯定感の高まりが教科学習に波及している様子が見え始める。

「地域との協働はかなり進みました。今後はほかの地域や海外の高校生との交流を増やし、新たな刺激を与えていきたいと考えています」(津渡先生)

図4 記録の蓄積のサイクル

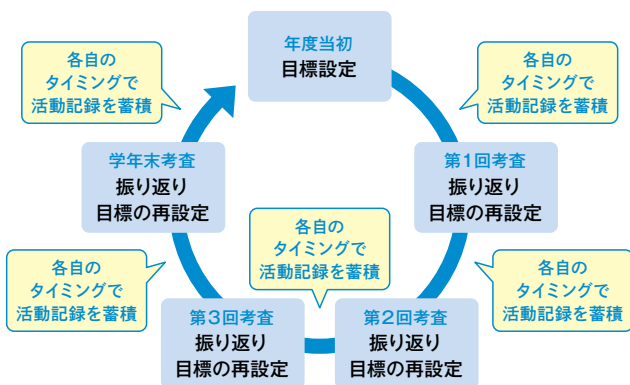


図3 「Classi」ストーリー機能の入力例



生徒は、活動前に目標を、活動後に取り組んだ内容や考えたことを入力。目標と照らし合わせて振り返る。教師はその入力内容を見て、コメントをしたり、声をかけたりする。また、その記録があることで、調査書や指導要録が格段に書きやすくなったと言う。

図5 生徒へのアンケート結果

Q. 探究活動や部活動、有志活動等の探究的な学びにおいて、地域での活動や地域の人々とかかわる場面はありましたか

はい 78.5%      いいえ 21.5%

Q. 探究的な学び(授業・探究学習・探究ツアー・NIE・国際交流・国際講話・部活動・有志活動等)を通じて、社会の課題に対する関心は高まりましたか

はい 100.0%

※図3～5は、学校資料を基に編集部で作成。

### 学習方法の指導は?

#### 1年次は、学習方法とペースの定着を重視

同校には、中学校と高校の学習にギャップを感じる生徒が少なくない。そこで、入学当初の各教科の授業は、家庭学習を中心に、高校における学習方法を指導し、学習のペースをつかめるよう、支援している。また、生徒一人ひとりの悩みや課題に対応するため、毎日の学習記録を見て、「数学に偏っている」「こんなテキストがある」などと、担任が生徒一人ひとりの学力や適性に合ったコメントをしている。そして、個人面談では、生徒の意欲を喚起する声かけや学習方法のアドバイスなどを意識的に行っている。

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

## 事例 2

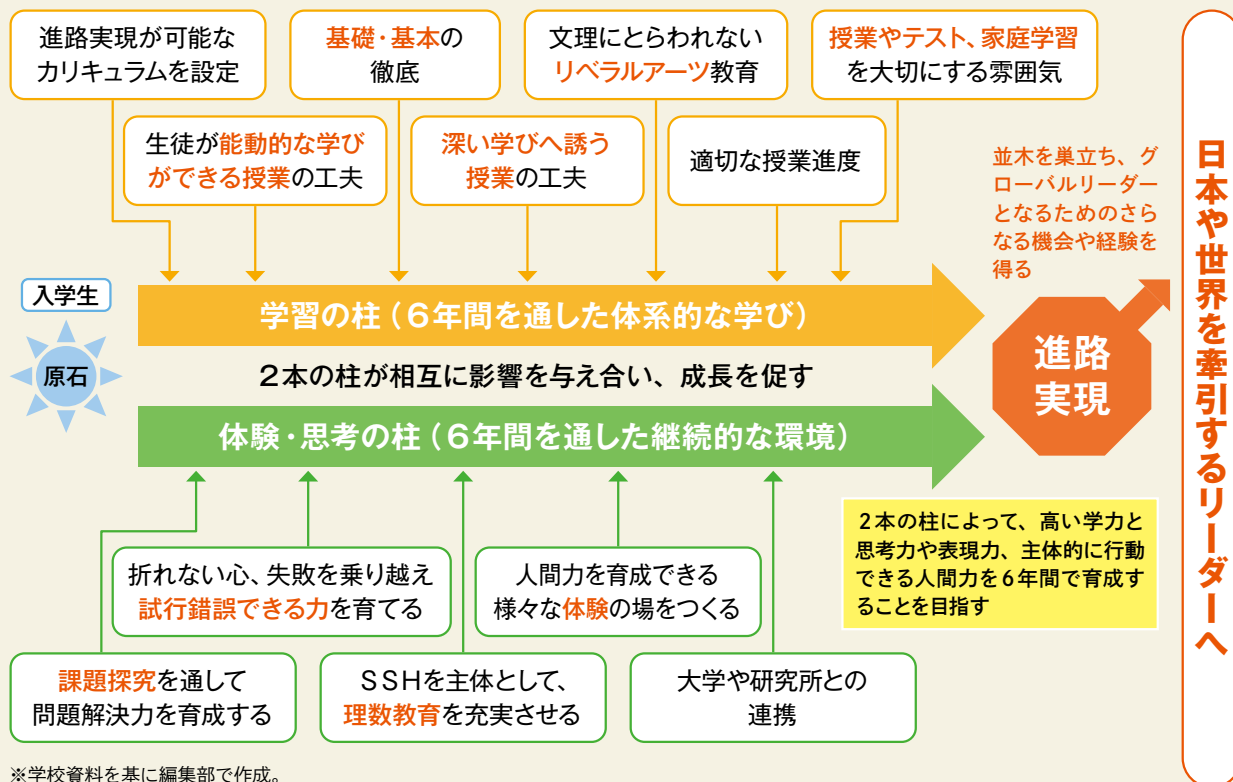
# 茨城県立並木中等教育学校

# 学年を超えて切磋琢磨する環境で、 能動的に学ぶ生徒を育てる

茨城県立並木中等教育学校は、「能動的な学びのできる人間力を備えたグローバルリーダー」を目指す生徒像に掲げ、プロセスを大切に探究学習に加え、異学年と合同の学習活動や地域の資源を活用した課外活動など、工夫を凝らした様々な活動で、生徒の意欲や主体性を育てている。

実践の全体像

## 目指す生徒像を実現するための6年間の学び



※学校資料を基に編集部で作成。

日本や世界を牽引するリーダーへ



**宮本 脩平**  
中学1学年担当  
みやもと・しゅうへい  
同校に赴任して4年目。英語科。



**石本 由布子**  
教務副主任  
いしもと・ゆふこ  
同校に赴任して6年目。地理歴史・公民科(日本史・公共)。



**吉村 大介**  
企画研究部部长  
よしむら・たいすけ  
同校に赴任して11年目。理科(化学)。



**石井 透雄**  
学習進路部副部长  
いしい・ゆきお  
同校に赴任して12年目。地理歴史科(世界史)。



**細井 ひろみ**  
学習進路部部长  
ほそい・ひろみ  
同校に赴任して11年目。国語科。

**学校概要**

設立 2008(平成20)年

形態 全日制/普通科/共学

生徒数 1学年約160人

2022年度卒業生進路実績 国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、千葉大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、大阪大、神戸大などに78人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大学、早稲田大などに延べ319人が合格。

# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

## 取り組みの背景・全体像

### 「学習」と「体験・思考」を柱に バランスよく教育活動を展開

SSH(\*1)指定校の茨城県立並木中等教育学校は、例年、難関国立大学の合格者を多数輩出する進学校だ。「**a Top Learner** (高き学習者たれ)」を校是とし、「能動的な学びのできる人間力を備えたグローバルリーダー」を目指す生徒像に掲げている。その実現に向けて、6年間を通して体系的な学びを行う「**学習の柱**」と、問題解決力や試行錯誤できる力を育む「**体験・思考の柱**」を教育活動の2本柱としている(P.8図)。学習進路部部長の細井ひろみ先生は、そのねらいをこう語る。

「**教科学習**と体験的な学びのどちらかに偏ることなく、バランスの取れた教育活動によって、**教科学力**や**思考力**、**人間力**などの**資質・能力**を育もうとしています」

「**学習の柱**」は毎日の授業のことを指す。全教科で探究的な学びを実践し、生徒が自分なりの問題意識を持ち、解決に向けて試行錯誤できるような授業を行っている。また学校独自の学習法も取り入れている。「**TO学習**」(\*2)は、異学年合同の授業で、上級生が下級生に問題の解き方を教えたり、一緒に考

えたりする。「**R80**」(\*3)は、ペアやグループで話し合ったことなどを80字以内でまとめる活動で、必ず2文で書き、接続詞で結ぶことがルールだ。いずれも生徒の主体的な学びを促し、論理力を育むことをねらいとしている。

「**体験・思考の柱**」の中心は6年間を通じた「**課題探究**」だ。1年次から生徒が自分でテーマを設定して探究に取り組み、探究を段階的に発展させるカリキュラムとした(図1)。失敗や成功を繰り返すことで、「まずはやってみよう」という主体性を育てている。

生徒が様々な体験を通じて人間力を高めていけるよう、学校行事や校外活動も充実させている(図2)。例えば、同校の3大行事の1つ「**ウォークラリー**」は、2日間で60kmを歩くというもので、苦しい時こそ踏ん張る精神力や、周りを思いやる心を涵養している。

### 意欲を喚起する「課題探究」

### 異学年合同のゼミで 助言し合い、試行錯誤を支える

同校の特徴的な学習活動は、4〜6年次の「**課題探究**」だ。生徒は個人で探究に取り組みが、まず4年次の1年間をかけて探究テーマを設定する。企画研究部部長の吉村大介先生は、その

図1 「課題探究」6年間の流れ

学年	探究テーマ	活動内容
1年次	ミニ課題探究Ⅰ (個人)	自分の「問い」と出会う 個人で探究テーマを設定し、調べたことをまとめて考察し、学年発表会で口頭で発表。
2年次	ミニ課題探究Ⅱ (グループ)	企業とともに未来をつくる 企業のインターンシップを教室で体験する活動を通して、働くことの意義や企業活動への理解を深める。企業からのミッションの実現に向けて様々なアイデアを出し合い、プレゼンテーションを行う。
3年次	ミニ課題探究Ⅲ (グループ)	地域の社会問題 グループで探究テーマを設定し、身近な問題の解決に挑戦。成果を学年発表会で口頭で発表。
4年次	課題探究Ⅰ～Ⅲ (個人)	ゼミに所属し、1年間かけて個人探究のテーマを設定。その手順は、探究構想を立てた後、仮テーマを設定。構想発表会・中間発表会(スライドを使い、口頭で発表)を経て、最終決定。
5年次		口頭及びポスターで研究成果を発表。
6年次		研究論文を作成し、提出(A4で10ページ以上)。

「課題探究」は、1〜3年次は「総合的な学習の時間」で、4〜6年次は「総合的な探究の時間」と学校設定科目「課題探究」で実施。ゼミは、人文・社会科学・国際文化・スポーツ科学・芸術・生活科学・物理・化学・生物・地球科学・情報科学・数学・医学・自然科学・SDGsの15ゼミ。

※学校資料を基に編集部で作成。

図2 人間力や国際貢献のマインドを育む校外活動(例)

全学年	ウォークラリー	2日間で60kmを歩く。保護者も交通整理などで参加
1年次	学級づくり合宿(P.11図6)	学級づくりのための開校以来の行事
2年次	ブリティッシュヒルズでの語学研修	外国人講師による英語コミュニケーションの授業、ジャーナルの作成・発表
3年次	広島・京都平和研修	社会見学、文化理解、平和教育
4年次	ニュージーランド海外語学研修	2週間のホームステイでの英語によるコミュニケーション、異文化体験
5年次	アジア方面海外修学旅行	2023年度はベトナムを訪問。戦争遺構の見学等

「ウォークラリー」「かえで祭(文化祭)」「スポーツデイ(体育祭)」が、同校の3大行事。2009年度にユネスコスクールに加盟後は、国際貢献・平和教育の視点を取り入れた学校行事を中学校段階から体系的に実施。各国の大使による講演なども随時行う。

※学校資料を基に編集部で作成。

\*1 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。同校は2012年度から指定され、現在3期目。 \*2 「TO」は、Teaching Others の略。  
\*3 「R」は、リフレクション(振り返り)とリストラクチャー(再構築)のこと。「TO学習」「R80」のいずれも中島博司元校長が考案。



ねらいを次のように語る。

「自分が何に関心があり、何を深めたいのか、どんな困り事を解決したいのかといったことを、1年間かけてとことん掘り下げてほしいと考えています。自分に徹底的に向き合い、自分を理解する過程は、自分らしい学び方や目指したい進路を見極める上で重要であり、主体性も育まれます」

調べ学習で終わらないよう、どんなテーマでも生徒は実験や調査などを自分で行い、データを収集する。教師がそれらの方法を教えることはなく、生徒は研究構想の段階で、自分の探究に必要な実験や調査などを様々に試す。

そうした試行錯誤の過程において生徒の心の支えとなり、成長の糧にもなるのがゼミ活動だ。15のゼミから自分の関心に応じて1つを選び、4〜6年生の各5人程が所属。週1回集まり、各目の探究の進捗を報告しつつ、テーマの設定や探究の進め方などを相談し合う(図3)。

「4年生は意欲的に探究している5・6年生の姿を見て、自分も先輩のように学びたいと憧れを抱きます。5・6年生は後輩にアドバイスをすることで、自分の考えが整理され、新たな気づきを得ます。異学年間の対話が、双方に刺激を与えています」(細井先生)

「課題探究」での成功体験が教科学習への意欲を喚起していると、教務副主任の石本由布子先生は語る。

「探究を通じて今までできなかったことができるようになった、難しい課題にも諦めずに努力できたといった経験は、生徒の自信になります。それが探究以外の活動にも積極的に取り組むことにつながっています」

意欲を喚起する「課外活動・コンテスト」  
**輝いている大人や他校生との対話が、生徒を刺激する**

学校がつくば研究学園都市にある立地を生かし、数々の課外活動も実施している(図4)。企業や大学の研究室への訪問、研究者に最先端のトピックを聞く講座など、本物に出会い、輝いている大人と話すことが生徒を刺激していると、学習進路部副部長の石井透雄先生は語る。

「講演では、講師の話を50分間、質問タイムを50分間としています。講師の話に関心がある生徒が集まるため、質問タイムはもちろん、会の終了後も質問が続くことは珍しくありません」  
コンテストなどへの参加(図5)も、生徒を刺激する場となっている。  
「コンテストを通じて全国の優秀な

図4 本物に出会う課外活動(例)



やJAXAの研究室の見学、ブナ・ミズナラの植樹体験や棚倉断層の観察などを行った。



病棟で働く研修医の卒業生、自動車開発者、水族館飼育員、培養肉・ベジミートの研究者、折り紙で数理現象を研究するオリガミクスの研究者などが来校した。

「SSH講座」は、企業の施設や大学の研究室などを訪問する体験型講座。2023年度は、千葉県市原市のチバニアン地層(地球で最後に地磁気逆転が起こった痕跡が残る地層)の観察、半導体工場

「SSHサイエンスカフェ」は、各分野の研究者等を招いて行う座談会形式の講座。2023年度は、月2人のペースでゲストを招いて開催。ドイツの大学で飛行機の研究をしている卒業生や、小児科

図3 「課題探究」で行う、4〜6年生が切磋琢磨するゼミ活動



ゼミには、4〜6年生が各5人程、計15人程が所属している。探究テーマは一人ひとり異なるが、関心を持つ分野は同じだ。自分が取り組みたいことをゼミのメンバーに伝えてアドバイスをもらう。理系分野の研究はもちろん、文系分野でもオリジナルのデータを収集し、提案型の研究発表を目指す。各ゼミには担当教師がつき、運営を任されている。人文ゼミ(写真)では、5年生がゼミ長と副ゼミ長を務め、ゼミの司会進行を担っている。なお、ゼミは移籍できないが、探究テーマはいつでも変えることが可能だ。人文ゼミで物理をテーマにする生徒もいるという。「学びたいという思いが尊重されることで、生徒は意欲を持續させることができるのだと思います」と、吉村先生は語る。

※図3・4は、学校資料を基に編集部で作成。

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

面談も生徒の自己肯定感を高めることを大事にしている。専門性や生徒との相性などを踏まえ、担任・副担任に限らず、その生徒にとって適任だと思われる教師が面談を担当。生徒が自分自身のことを信頼し、前向きになれる

『答えを写すだけでは駄目だよ』などと指導する一方で、受け身の学習とならないよう、『ノートの書き方が分かりやすいね』などと、よい点を見取り、積極的に褒めています」

1年次の導入期は、主体的に学ぶ意欲が高まるよう、学級づくり合宿を実施し、カッター研修(図6)などで成功体験を積み重ねるとともに、普段から褒めるようにしていると、中学1学年担当の宮本脩平先生は語る。

**意欲を喚起する「導入期指導・面談」  
成功体験を積みませ、  
積極的によい点を褒める**

高校生と交流し、本物の研究者や起業家と接する経験は、生徒の財産になっています。コンテストに挑戦した先輩の姿を見て、自然と全国を目指す雰囲気校内にありますし、対外的な場に参加する意義を伝え、生徒の背中を押すことも心がけています」(石本先生)

『学校は「生徒のこうとこう探しの場」であるはずなんです。できないことを指摘するのではなく、よいところ、できることを伸ばす。これからも生徒同士、教師同士で認め合い、集団として成長できる環境をつくっていききたいと思っています」(石本先生)

一連の取り組みの結果、東京大学志望者が数年間で1.5倍となった。中には自分の力を超える高い志望を持つ生徒もいるが、逆転合格者も出ている。「課題探究」の成果を生かして総合型選抜で進学する生徒も増えており、学校全体に生徒間で切磋琢磨する雰囲気が出てきている(図7)。

**取り組みの成果・展望  
切磋琢磨する生徒集団と  
なるよう環境を整える**

「以前、クラスの中心的存在の生徒が面談中、泣き出したことがあります。私はその姿を黙って見守りました。すると生徒は十数分間で泣き止み、腹をくくって前を向き直しました。自分の弱さをさらけ出す場が必要だったのでしょう。立ち直る力を信じて見守ることも、生徒が前を向くきっかけになるのだと感じました」(石本先生)

図7 いつでも学べる自習棟「ブライツホール」



自習棟「ブライツホール」には、4～6年生が平日・休日を問わず自習できる学習室があり、多い日は100人近い生徒が利用する。メリットは、生徒同士で切磋琢磨する雰囲気が自然とできる点にある。「あの子がいるから自分も頑張ろう」という生徒もいれば、自習棟の明かりを見て、夜遅くまで頑張っているクラスメートの姿に刺激され、「自分もやってみようかな」と意欲が湧く生徒もいる。自習棟をよく利用する生徒は「ブライツ組」と呼ばれ、各クラスに学ぶ雰囲気をつくる存在になっている。



ブライツホールには話し合いのスペース「TOルーム」(\*4)がある。自習中に難問にぶつかった時、生徒が集まって意見を交わしながら解く場として活用されている。難問の解答がホワイトボードに誇らしげに残されていることもよくあるという。

\*4 「TO」は、Teaching Others の略。

図5 各種コンテスト受賞実績(例)

- 「科学の甲子園ジュニア」全国大会に8回出場。2020年度は全国総合4位
- 「科学の甲子園」全国大会に5回出場。2017年度は全国総合4位
- 「科学オリンピック」2021年度日本生物学オリンピック金賞1人、銀賞1人、銅賞1人

図6 1年次の導入期の学級づくり合宿でのカッター研修



1年次5月に行われる学級づくり合宿では、カッター研修が行われる。大型ボートに生徒約25人が乗り、力を合わせてオールを漕ぎ、湾内を1周する。頑張ることの大切さを認識し、クラスの団結力を高めるとともに、成功体験を通して前向きに学校生活をスタートさせることを目的としている。午前中にオリエンテーリングを行い、4～5kmを歩いた後、午後にカッターを漕ぐといった体力的に厳しい活動にすることで、折れない心も育てている。

※図5～7は、学校資料を基に編集部で作成。

## 事例 3

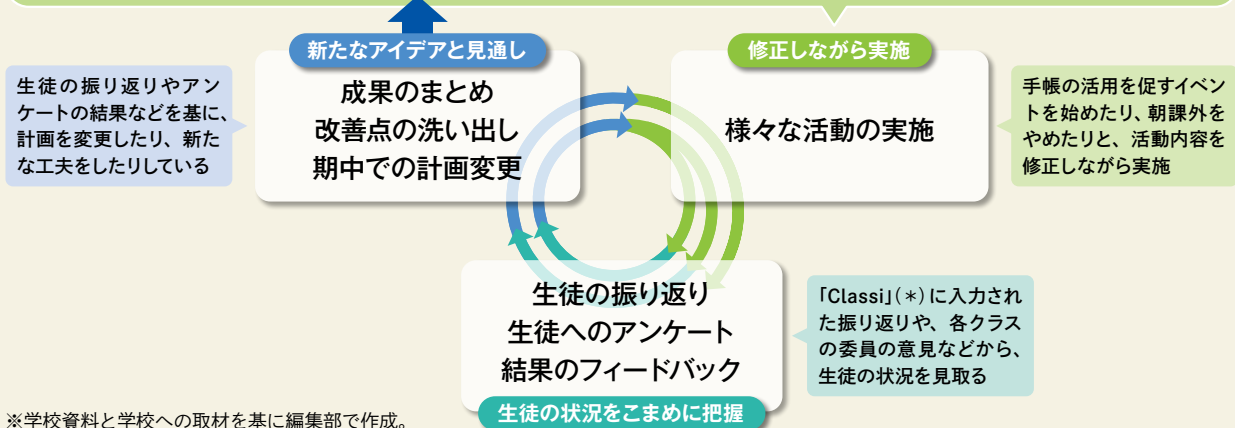
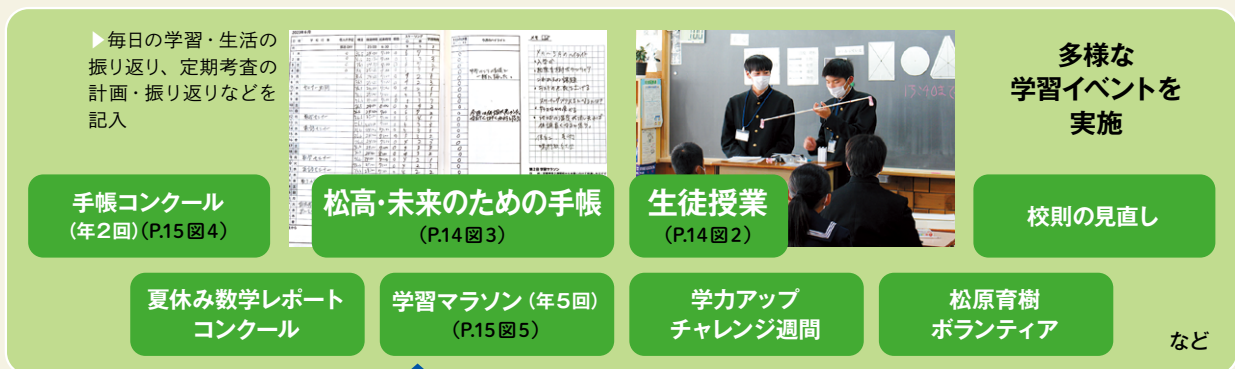
# 徳島県立小松島高校

## こまめな生徒把握で学習イベントを修正。 生徒が自ら選ぶ学びで意欲を向上

徳島県立小松島高校には、中学校時代は学力中位層で、自己決定の経験があまりない生徒が多い。そこで生徒が自ら選んで学習できるよう、放課後課外や朝課外をやめ、多様な学習イベントを打ち出した。生徒をこまめに見取り、年度途中でも活動を修正して、生徒の実態に合ったものになるようにしている。

### 実践の全体像

### 自分の物語をつくる「松高 未来のためのまなびプロジェクト」



※学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。



**数学科主任 姫田史也**  
ひめだ ふみや  
同校に赴任して11年目。3学年担任。数学科、情報科。



**企画推進課チーフ、英語科主任 久保早耶香**  
くぼ さやか  
同校に赴任して10年目。2学年担任。英語科。



**1学年主任、国語科主任 伊藤奈津子**  
いとう なつこ  
同校に赴任して10年目。国語科。



**同校に赴任して12年目。数学科、情報科。笠江由美**  
かさえ ゆみ  
指導教諭、次世代育成支援対策推進委員



**教頭・教務担当 牧野浩章**  
まきの ひろあき  
同校に赴任して2年目。地理歴史科（地理）。

**学校概要**  
設立 1931（昭和6）年  
形態 全日制／普通科／共学  
生徒数 1学年約170人  
2022年度卒業生進路実績 国公立大は、徳島大、鳴門教育大、香川大、都留文科大、高知工科大、北九州市立大などに10人が合格。私立大は、立命館大、関西大、近畿大などに延べ119人が合格。短大・専門学校進学39人。就職16人。

\* 株式会社ベネッセホールディングスとソフトバンク株式会社の合弁会社である Classi 株式会社が提供する、学校教育での ICT 活用を総合的に支援するサービス。

# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

取り組みの背景・全体像

## 若手教師の課題感から、カリマネと併せて改革を推進

徳島県立小松島高校は2018年度、生徒の自走を支えることを目指して、「松高 未来のためのまなびプロジェクト」(以下、プロジェクト)をスタートさせた(P.12図)。そのきっかけは17年度に行った、台湾の高校生の訪日交流事業だ。若手教師が中心となって交流活動を立案する過程で、生徒の実態を整理したところ、自校の課題が浮き彫りになり、教師間で改革の機運が高まった。交流事業の立案に携わった1学年主任の伊藤奈津子先生は、当時を次のように振り返る。

「本校の生徒の多くが、中学校時代は学力中位層であり、生活面でも学習面でも注目や注意をあまり受けてきませんでした。そうした生徒も本校では、自分たちが中心となって学習も学校行事なども進めていきます。そこで、生徒が自分で判断して物事を進める活動をプロジェクトとして行い、生徒の自己肯定感を高めていこうと考えました。新学習指導要領の実施を控えていたこともあり、カリキュラム・マネジメントと併せて、プロジェクトを進めていきました」

当時の校長の後押しもあり、若手教師中心のプロジェクトチームを編成。まず、生徒の学力推移や問題行動が起きやすい時期など、課題を改めて整理し、校内で共有した上で、育成を目指す資質・能力を職員会議で議論した。そして、「自分の物語をつくる」をキーワードに、人間的成長を上位目標とした「身につけたい力」(図1①②③)を設定し、21年度にはルーブリックを作成した。

同時に、カリキュラム・マネジメントの視点で教育活動を見直した。19年度に課題テストの実施を年5回から3回に変更し、放課後課外を廃止。一方で、学習時間などを毎日記入する生活記録を月1回提出させ、家庭学習習慣の定着を図った。さらに、自ら選んで視聴した学習動画のレポートを書く「学力アップチャレンジ週間」など、任意参加の学習イベントを実施して、生徒に参加を呼びかけた。指導教諭の笠江由美先生は、次のように説明する。

「放課後課外は生徒の成績次第で復活させる条件で廃止しましたが、成績は低下せず、22年度には朝課外もやめました。ただその後、生徒の学習意欲の高まりを受けて、希望者を対象に放課後課外を再開しました。どの活動も、参加するかどうかを選べるからこそ、参加した生徒は意欲的に学びます」

図1 「身につけたい力」と「松高ルーブリック」

**校訓**

自主自律  
親和協同  
日新日進

**身につけたい力**

① 自分とむきあう

- 自分のことを知る
- 自分の目標を持つ
- 自分がやる、自分でやる
- 自分をコントロールする
- 昨日の自分より前進する

② 人とむきあう

- 相手と真剣に話す
- 相手の立場で考える
- 相手のことを認める
- 自分の考えを伝える
- 協力して目標を達成する

③ 世界とむきあう

- 世界のことを知る
- 地域のことを知る
- 情報を適切に活用できる
- 世界・地域の課題を見つける
- 社会貢献への意欲がある

資質・能力	レベル1	レベル2	レベル3 3年次修了時の到達目標	レベル4	F
① 自分と むきあう	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分について情報を収集し、自分の長所を知っている。①-1</li> <li>自分は集団の一員だと感じることができる。①-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①-1、2</li> <li>見通しを立てることができる。①-3</li> <li>自分をコントロールし、学びに、むかい、試行錯誤を重ねることができる。①-4</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①-1～4</li> <li>自分の不完全さを受け入れることができる。①-5</li> <li>試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決にむかうことができる。①-6</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>①-1～6</li> <li>試行錯誤や振り返りを通して粘り強く問題の解決ができていく。①-7</li> </ul>	いずれも 満たさない
② 人と むきあう	<ul style="list-style-type: none"> <li>相手に関心を持ち、相手の立場に立つことができる。②-1</li> <li>共感的態度をもって話をする。②-2</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>②-1、2</li> <li>相手に理解してもらえるように、言葉や非言語能力を使って自分の考えを述べたり、コミュニケーションを取ったりできる。②-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>②-1～3</li> <li>他者を信頼することができる。②-4</li> <li>仲間と協力して目標を達成しようとする。②-5</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>②-1～5</li> <li>仲間と協力して目標を達成できる。②-6</li> </ul>	いずれも 満たさない
③ 世界と むきあう	<ul style="list-style-type: none"> <li>自分が住む地域や世界について情報を収集している。③-1</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>③-1</li> <li>世界や地域の課題を発見している。③-2</li> <li>解決にむけた取り組みを考えをめぐらせることができる。③-3</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>③-1～3</li> <li>情報を適切に活用することができる。③-4</li> <li>自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考えて行動している。③-5</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>③-1～5</li> <li>自分を生かして社会や他者の役に立ちたいと考え、行動し、周囲に働きかけを行っている。③-6</li> </ul>	いずれも 満たさない

3つの「身につけたい力」の「松高ルーブリック」を基に各教科・科目のルーブリックを作成し、生徒も教師も「身につけたい力」を授業で意識できる仕組みとした。※学校資料を基に編集部で作成。

意欲を喚起する「生徒授業」

「他者に教える」という目的が主体的な学びを促す

プロジェクトの柱は、生徒が教師役となつて授業を行う「生徒授業(図2)だ。「深く考えることの大切さ」などを生徒が実感することを目的に、笠江先生が17年度に担当した数学の授業で始めた。同級生に加えて、学校説明会での中学生への模擬授業で行ったところ、参加者に好評だった。そこでプロジェクトを機に、「生徒授業」を2年次の「総合的な探究の時間」における探究学習の1テーマとし、中学校への出前授業も開始。校内研修で教師に「生徒授業」の実施ポイントを共有し、各教科が状況に応じて行うようにした。

「他者に教えるためには自分が深く理解する必要がある、自分で何が必要かを考えて学ぶようになります。自らの工夫で他者が理解してくれば、自己肯定感につながります。様々な効果も期待できる活動です」(笠江先生)

意欲を喚起する「松高・未来のための手帳」  
毎日の記入が自己管理能力を高め、自走につながる

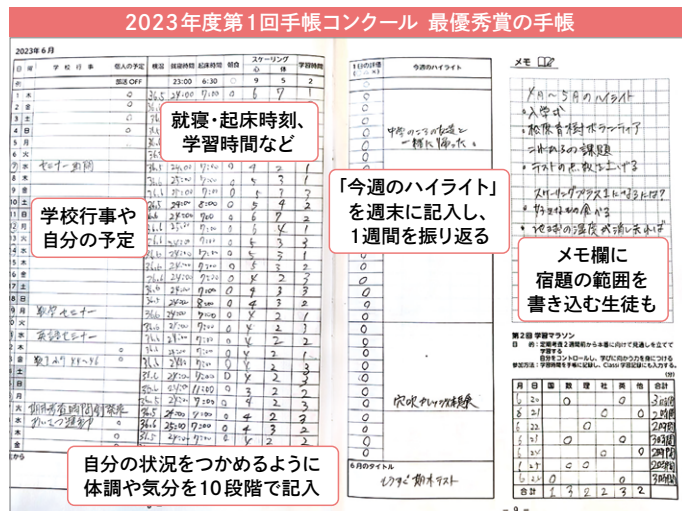
20年度には、生活記録を基に、学習

や学校行事などを記録する「松高・未来のための手帳(以下、手帳)」(図3)を導入した。

「毎日の学習や行事予定などを手帳に書くことは、『来週はこの行事があるから、課題は今週中に取り組んでおこう』などと考える機会になります。書き続けることでメタ認知や自己管理が少しずつできるようになり、振り返りも理由を添えてよかった点や課題を書くようになっていきます。手帳の活用法を共有しようと、『手帳コンクール』(図4)を始めました」(笠江先生)

「手帳」の活用を促す仕かけとして、「学習マラソン」(図5)も始めた。「手帳」に記入した学習時間を1週間分集計し、クラス・個人の上位者を表彰するイベントで、一人ひとりの努力を評価する機会にもなっている。今は学習時間を「Class」に入力させている。生徒の学習意欲がより高まりやすくなったと、数学科主任の姫田史也先生は語る。「Class」で総学習時間がグラフで示されるので、生徒は自分の学習状況を把握しやすくなりました。『前回は数学に時間をかけ過ぎたから、今回は英語に力を入れよう』などと計画を立てられます。『たとえ0時間でも、それを自覚するために毎日入力しよう』と、生徒に呼びかけています」

図3 メタ認知や自己管理を促す「松高・未来のための手帳」



- A5版、64ページ ● 学年ごとに1冊ずつ用意
- 各ページの項目は教師が話し合つて作成した学校オリジナル
- 毎日の生活の記録、定期考査に向けた学習計画と振り返り、委員会や生徒授業の記録、学校行事の振り返りなどを記入。進路を考える材料にする
- 生徒に手帳を定期的に提出させ、クラス担任が生徒の記入に視線を引いたり、コメントを書いたりして返却。生徒が適切にメタ認知し、自己管理ができるようになることを支援している
- 手帳に書かれた生徒の様々な活動記録を、教師は調査書や指導要録を記入する際に活用

※図2・3は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

図2 生徒の学習意欲を育む「生徒授業」

概要

- 生徒が教師役となり、校内で授業を行う
- 実施する授業の内容は基本的に、担当学年・教科の教師が提示したテーマを基に生徒が考える
- 学校説明会で中学生に対して行う模擬授業や、中学校への出前授業としても実施

ねらい・効果

学びを蓄えていく視点

小・中・高の学びのつながり

探究する楽しさ

他教科とのつながり

本当の分かるを体感

分かりやすく伝える

主体的に学ぶ楽しさ

自分の成長

伝えたい思いが伝わった達成感

教師役を担当した生徒の声

- 重要な箇所はチョークの色を変えて黒板に書いた。授業を受けた人が「分かりやすかった」と言ってくれてうれしかった。次も頑張りたい
- 数学の授業で、具体的に数をあてはめて説明したところ、先生に「いい説明だね」と褒めてもらった。式が長かったので、短く説明できたのがよかったのだと思う

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする —

意欲を喚起する「生徒の声の活用」

### 生徒の声をキャッチし、 年度内でも活動を修正

活動は、生徒や活動の状況を見取り、年度途中で修正したり、新たに始めたりと、より効果的なものになるようにしている。その判断材料の1つが、生徒の振り返りだ。主要な活動では、生徒が「Classi」に入力した振り返りの中で他の教師や生徒に共有したい内容を、教師がコピー&ペーストしてための、「Classi」を共有している。

生徒の声を直接聞き、活動に反映することも大切に行っている(図6)。例えば、「学習マラソン」に対する改善点を各クラスの委員長に聞いたところ、「1週間前はみんな勉強するから、2週間前の方がよい」という意見が出たため、実施期間を定期考査2週間前からの1週間に変更した。

また、生徒や保護者にICTでアンケートを取り、その結果を活動に生かすこともある(図7)。企画推進課チーフの久保早耶先生は、次のように語る。

「Classi」のアンケート機能の活用によって、生徒の声をタイムリーに把握することができるようになりました。自分たちの声が反映されることを

経験した生徒は、学校生活に対して積極的になっています。学校への満足度は、年度末には入学時と比べてかなり上がります」

### 取り組みの成果・展望

### 保護者の約8割が子どもの学習意欲の向上を実感

プロジェクトを始めてから、生徒は長期休業明けも落ち着いて学習に取り組むようになった。卒業時には、生徒から「3年間、学習を頑張った」「課外活動など、たくさんチャレンジができた」といった声が聞かれ、保護者へのアンケートでは約8割が「入学後、子どもの学習意欲が高くなった」と回答した。また、「松高ループリック」の自己評価を行ったところ、生徒の1年次1月の自己評価が教師の評価と一致し、生徒のメタ認知能力が上がったことを実感したという。牧野浩章教頭は、今後の展望を次のように語る。

「参加する活動を生徒が自分で選ぶというスタイルが、生徒の主体性を尊重することにつながり、結果的に学習意欲や自走力を高めていると感じています。学校全体が落ち着き、学習に向かう環境が整ってきた中、学力向上はおのずと実現されると考えています」

図6 生徒の声を反映して修正した活動(例)

- 「手帳」のメモ欄を、罫線ではなく、マス目に変更
- 校則の見直しについて、各クラスがホームルームで話し合い、生徒総会と職員会議を経て決定。靴下の規定やアルバイトの条件が緩和された
- 中学校での「生徒授業」で、教師が設定したテーマの中から選ぶ形から、生徒が自分でテーマを考える形に変更。加えて、訪問先の中学校を教師が割り振るのではなく、各生徒の母校に変更

図7 生徒にICTで取ったアンケート(例)

- 「松高ループリック」(P.13図1)について、生徒の自己評価のアンケートを1年次4月と12月に実施
- 卒業式の退場曲は、3年生にアンケートを取って決定
- 生徒と保護者に学校評価のアンケートを年度末に実施

職業調べ (P・K・現代の道)	その他	R5 1年生	158/168	145/168	2023/11/20 19:25	集計
イチョーが伝えたいことは?	その他	R5 1年・2年・3年	285/502	93/502	2023/11/16 14:20	集計
保健アンケート (心身の健康と)		R5 1年・2年・3年	416/500	397/500		

アンケートは「Classi」で配信。回答率が低い場合は、教師が口頭でも生徒に回答を促す。

※図4～7は、学校資料と学校への取材を基に編集部で作成。

図4 「松高・未来のための手帳」の活用法を共有する「手帳コンクール」

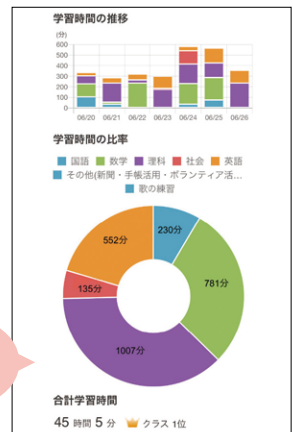
自分の「手帳」の活用法を、該当のページの画像と200字程度の説明文とともに「Classi」のポートフォリオから応募。校長と教頭、学年主任が、ほかの生徒に参考にしてほしいと思った活用法を最優秀賞、優秀賞、審査員特別賞として選出。年2回実施。



2023年度は  
72人が応募

図5 学習時間を見える化する「学習マラソン」

定期考査の2週間前からの1週間、生徒が教科別の学習時間を「Classi」に入力。総学習時間の上位3クラスと個人上位3人を学年別に表彰する。参加は任意で、年5回実施。1週間の学習時間を教科別にグラフにして、全校に発表する。生徒からは、「計画を立てて勉強することができた」「モチベーションが上がり、学習時間をいつもより増やすことができた」といった声が上がっている。



約8割の  
生徒が参加

# 6つの志向を踏まえて、 学びの動機づけをいかに図るか

事例の3校が様々な工夫している取り組みは、どのように学習意欲を喚起しているのか。東京大学の市川伸一名誉教授に、自身が提唱する「学習動機の2要因モデル」を基に、各校の活動と学習意欲のつながりを分析してもらった。さらに、学習意欲を高める方策として、「習得」と「探究」のサイクルを取り入れた授業づくりについて聞いた。

東京大学名誉教授、東京都・私立帝京大学中学校・高校 校長

市川伸一

## 学習動機のタイプ分け

### 大学生調査から、学習動機を6つの志向に構造化

私が学習動機に着目したきっかけは、東京工業大学に勤めていた1989年に、地域の小・中学生や高校生を対象に行った学習相談室でした。子どもから学習の悩みを聞くうちに、子どもが自律的に学ぶようになるためには、分からないところをその都度教えるだけでなく、その子どもがどのように学習して

いるのかに焦点をあてて学習改善を図るべきだと考えるようになりました。さらに、学習方略は「自分は何のために学ぶのか」といった学習動機と関係しているのではないかと考え、学習動機や学習意欲の向上の要因についての調査を、大学1年生を対象として自由記述方式で実施しました。その結果を分類し、構造化したものが「学習動機の2要因モデル」です(図1)。

図1の中の①③は、学習内容そのものを重視する学習動機で、「内容関連」と呼んでいます。

① **充実志向** 学習の内容自体が面白く、やりがいを感じる。

② **訓練志向** 学習は頭を鍛えるために行うもので、何に役立つかは分からないが、大人になってから発揮されると考えている。

③ **実用志向** エンジニアになりたい、海外で仕事をしたいなど、学習が将来の仕事に役立つという動機。

図1の中の④⑤⑥は、学習内容と関係が浅い学習動機であり、「内容分離動機」と呼んでいます。

④ **関係志向** 友人と一緒に楽しんでいる、先生が好きだから頑張るなど、その人がいるから学びに参加する。

⑤ **自尊志向** 競争に勝つ、他者より成

**いちかわ・しんいち** 文学博士。専門は教育心理学。認知心理学を基盤にした個別学習支援や授業づくりなどの実践研究に取り組む。長年、中央教育審議会教育課程部会の委員を務め、学習指導要領改訂に携わってきた。帝京大学先端総合研究機構次世代教育研究部門特任教授などを兼任。著書に、『これからの学力と学習支援 心理学から見た学び』(左右社)、『授業からの学校改革』(図書文化社)、『勉強法が変わる本 心理学からのアドバイス』(岩波ジュニア新書)など多数。



# 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

績がよいなど、競争心やプライドから成る動機。

**⑥報酬志向** 成績が上がったらお小遣いをもたらるなど、報酬が目あての動機。「先生から褒められたい」といった社会的報酬も含まれる。

## 6つの志向の関連

### 報酬が目あてでも

### 学びの入り口としては有効

「内容関与動機」が高い子どもは、結果として「内容分離動機」の子どもに比べてよい成績を上げる傾向があります。学習内容を身につけようと自分で学習方略を工夫するので、学習の質が高くなるからです。

先生方は、生徒が「内容関与動機」で学べるように指導していると思います。その教科・科目が好きだから一生懸命勉強して教師になり、生徒も同じように**①充実志向**で学んでほしいと考え、教科・科目の魅力を伝える工夫をしていることと思われます。あるいは、「社会で生きる力を身につけさせる」といった観点で、**②訓練志向**や**③実用志向**を重視する先生も多いでしょう。

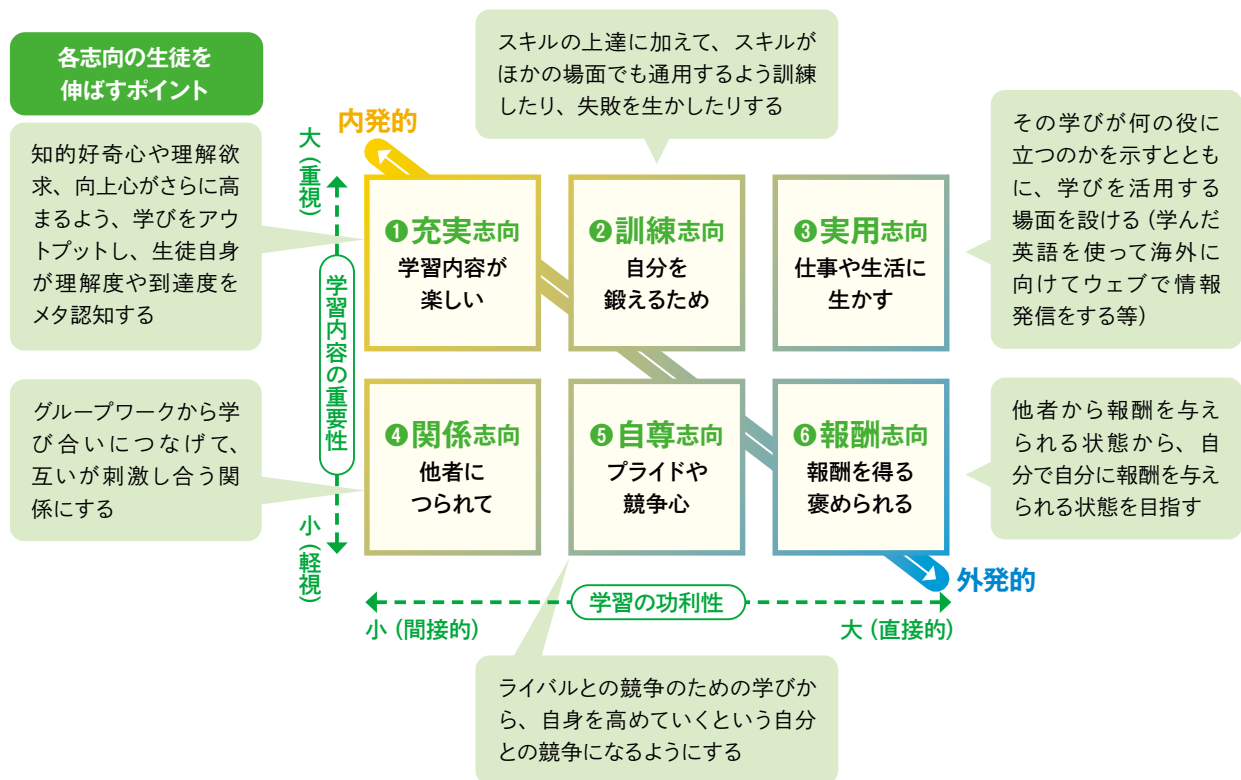
しかし、生徒がすべての教科・科目の学習内容に学ぶ意味を見いだすことは難しく、「テストに出るから覚えて

おくこと」などと、**⑥報酬志向**で学習意欲を上げようとすることもあるかもしれません。「内容分離動機」は、先生方にはあまり好まれないかもしれませんが、学習が苦手な子どもが学びに向かう入り口としては有効だと考えています。

例えば、友人と一緒にだとやる気が出るといった**④関係志向**や、少々幼いころかもしれませんが、シールをたくさん貼ってもらうために頑張る**⑥報酬志向**でも、学習動機として有効なケースがあります。そして、それらが最初の学習動機であっても、学習の過程で成り功体験を積み重ねることによって学習内容の面白さや実用性を認識し、「内容関与動機」に移行することがあります。「内容分離動機」を学習の入り口として、そこにとどまることなく、「内容関与動機」につなげる仕かけが大切です。

学習動機は生徒それぞれに異なります。同じ志向を持っていても生徒によって強弱があるでしょうし、1人の生徒の中に複数の志向があるはずで、そこで、6つの志向をそれぞれ刺激する活動を行うとともに、生徒の志向性に合った活動に重点を置いたカリキュラムにするとよいでしょう。図1には6つの志向の生徒を伸ばすポイントを例示したので、参考にしてみてください。

図1 「学習動機の2要因モデル」 学習意欲に影響する6つの志向と、各志向の生徒を伸ばすポイント



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。



3校の実践に見る動機づけのポイント

6つの志向を刺激しつつ、  
生徒の気質に応じて重点化

事例1～3の各校の実践が、6つの志向のどれにつながっているのかを見ていきます(図2)。

事例1の宮城県岩ヶ崎高校は、地元商店街との連携や地域コーディネーターの支援によって**4関係志向**を生み出し、探究学習の楽しさややりがいを感じ、**1充実志向**も高めています。地域の依頼に応じた課題に取り組むことは、**3実用志向**につながります。

ICTツールの書式を利用した活動記録は、「空欄を埋めたい」という欲求を引き出している点で**6報酬志向**と言えます。空欄を埋めるための学習の過程では、学びの面白さを知り、**1充実志向**への転換が期待できます。**6報酬志向**を入力口に「内容関与動機」へと発展させる戦略的な取り組みだと思えます。

事例2の茨城県立並木中等教育学校が行う「課題探究」は、自分が心底追究したいテーマを考へる過程で学習そのものの面白さを感じさせる**1充実志向**の取り組みです。そして、「課題探究」の成果を生かしたコンテストなどへの参加は、自分の力を試すのであれば**5自尊志向**であり、結果はどつであれ、**自尊志向**であり、結果はどつであれ、

挑戦する過程が楽しいのであれば**1充実志向**になります。また、企業訪問や研究者の講演など、本物に触れる経験は**3実用志向**を喚起させます。

教科学習や探究学習における異学年合同の活動は、**4関係志向**をうまく引き出しています。教わる側の下級生はもちろん、教える側の上級生にとっても学びの理解が深まるので、双方にとって**1充実志向**につながります。

それらと同様の効果を上げているのが、事例3の徳島県立小松島高校の生徒授業です。**4関係志向**から始めた学びが、**1充実志向**になっていく様子が見られました。他者が理解できるように伝える学びは、社会で必要な力身につける**3実用志向**の面もあります。

「学習マラソン」は、クラスで協力したいという思いを引き出す**4関係志向**の活動で、実際に貢献できたことに誇りを感じる**5自尊志向**につながっています。加えて、「松高・未来のための手帳」で自分の成長や課題をメタ認知する機会が日々あることが、**1充実志向**に結びついていました。

3校とも、6つの志向それぞれを刺激しつつ、生徒の志向の特徴に応じた活動に重点を置いたカリキュラムとし、より多くの生徒に学習の動機づけを図っていました。

図2 3校の実践と6つの志向の関係(各校の記事で取り上げた活動を分類)

	事例1 宮城県岩ヶ崎高校 (P.4-7)	事例2 茨城県立並木中等教育学校 (P.8-11)	事例3 徳島県立小松島高校 (P.12-15)
<b>1 充実志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクションプラン(知らなかったことを知る、自分で学びを深める)</li> <li>岩高探究ツアー(地域を深く知ることが楽しい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題探究(1年間かけて探究テーマを設定)</li> <li>異学年合同のゼミ活動、TO学習(他者に教えるために自分が深く理解する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(他者に教えるために自分が深く理解する)</li> <li>松高・未来のための手帳(自分の努力をメタ認知し、達成感を得る)</li> </ul>
<b>2 訓練志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用した活動記録(蓄積した記録を振り返り、成長を実感する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>課題探究(研究に必要なデータを自分で収集する)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>松高ルーブリック(次に目指す状態を明確に持てる)</li> </ul>
<b>3 実用志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>Iwagasaki Jimoto大学、アクションプラン(地域の課題や状況を知る)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>SSH講座、SSHサイエンスカフェ(本物の研究や実社会に触れる)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(他者が理解できる説明をする)</li> </ul>
<b>4 関係志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>アクションプラン(地域課題に取り組む)</li> <li>岩高探究ツアー(気仙沼市で同市の中高生の語り部の話を聞く)</li> <li>地域コーディネーターの配置(地域の役に立ちたい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>異学年合同のゼミ活動、TO学習(後輩に教えられるように頑張る、優れた研究・指導を行う上級生に憧れる)</li> <li>カッター研修(仲間と一緒に頑張ることができた)</li> <li>ライトホール(仲間が頑張っているから自分も頑張る)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>生徒授業(友人に教えられるよう、頑張る)</li> <li>学習マラソン(クラスで協力したい、仲間が頑張っているから自分も頑張る)</li> </ul>
<b>5 自尊志向</b>		<ul style="list-style-type: none"> <li>コンテストなどへの参加(競い合って自分の力を試したい)</li> </ul>	<ul style="list-style-type: none"> <li>学習マラソン(クラスに貢献できたことに誇りを感じる)</li> </ul>
<b>6 報酬志向</b>	<ul style="list-style-type: none"> <li>ICTを活用した活動記録(自分の活動を一覧化すると、未記入の項目が気になり、埋めたくなる)</li> </ul>		<ul style="list-style-type: none"> <li>手帳コンクール(教師に認められる)</li> </ul>

注) 各校の活動は、複数の志向にまたがっているケースがある。 ※市川名誉教授の取材を基に編集部で作成。

## 学習意欲の向上

— 学びの志向を捉えて教育活動をデザインする

学習意欲を高めるための視点

### 「習得」と「探究」の往還で、 学習意欲を刺激する

3校の事例では探究学習の実践が多く取り上げられており、探究学習の意義が高校現場に浸透してきたことを実感しました。だからこそ生徒の学習意欲を高める上で着目してほしいのが、「習得」と「探究」のバランスです。基礎・基本の知識を身につける「習得」と、自分で設定したテーマを追究する「探究」は、どちらも等しく重要な学びであり、学習指導要領では「習得・活用・探究」の学習プロセスが示されています。

「習得」と「探究」は別々に存在する学びではありません。「習得」で身につけた知識・技能を生かして「探究」するとともに、「探究」を通じて自分の足りない知識・技能を自覚することが、「習得」の動機づけになるといった関係があります(図3)。例えば、探究の成果を海外の高校生に発信する活動を行い、相手にうまく伝えられなければ、英単語や文法などの必要性を痛感し、英語の授業に一生懸命取り組むようになります。その結果、海外の高校生とスムーズにやり取りができるようになります。授業への意欲がさらに高まります。ところが、生徒は自分で学びを深め

る「探究」には意欲的でも、知識・技能の「習得」への意欲が乏しいといった課題をしばしば耳にします。そこで、「習得」においても楽しく学び、成長を実感できる「教えて考えさせる授業」を紹介します。

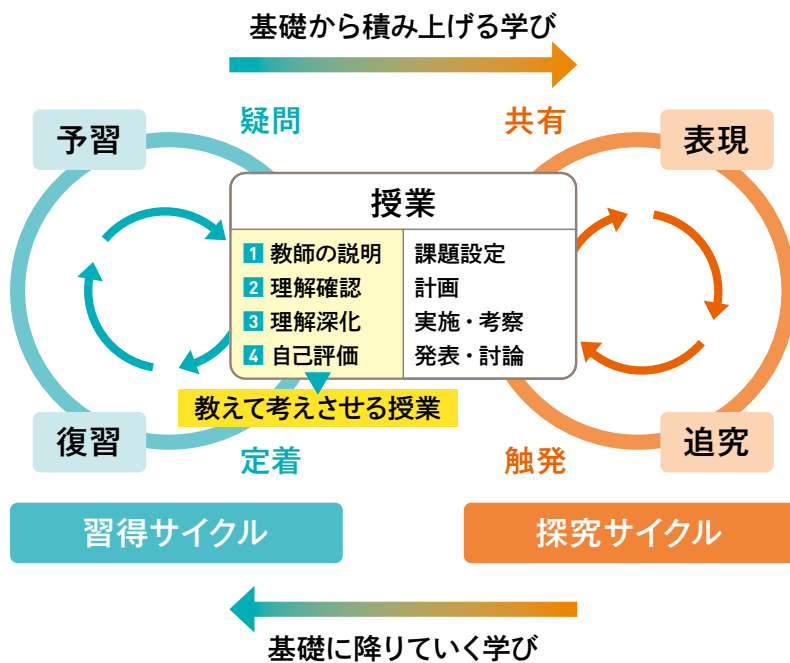
授業の流れは、**1教師の説明**、**2理解確認**、**3理解深化**、**4自己評価**となります(図3)。そこで重要なのは、**2理解確認**です。人は一度説明を聞いたからといって、その内容をきちんと理解するとは限りません。**1教師の説明**後、理解した内容を隣同士で伝え合うなど、生徒がアウトプットし、学習内容の**2理解確認**をする場を設けてみてください。そうして基本的な知識を共有してから、**3理解深化**で高い問題解決を行うのです。インプットしたことを自分の言葉で説明する、考えを出し合っで協働で問題を解決する、自分の理解度を**4自己評価**し、学び方の改善につなげるといったサイクルを「習得」の授業で行えば、基礎から積み上げる学びとして探究学習にも生きてきます。

探究学習が日常的に行われるようになった今こそ、教科・科目間のつながりや、「習得」と「探究」の往還を意識したカリキュラムを、学校全体で議論していただきたいと思います。

図3 「習得」と「探究」のサイクルの関係

### 教えて考えさせる「習得」の授業の進め方

- 1 教師の説明**  
一斉授業で教師が知識を説明する。
- 2 理解確認**  
教師が説明した内容について、生徒同士で口頭で説明し合い、互いに理解できているかどうかを確認する。生徒は後輩に教えるような気持ちで伝える。教師はその様子を見て、生徒の理解が不十分な場合、改めて説明する。
- 3 理解深化**  
知識を活用して解く問題を提示。生徒は協働して取り組む。知識を理解していることは確認済みであるため、学習が得意な生徒と苦手な生徒と一緒に考えることができる。
- 4 自己評価**  
授業で「分かったこと」「分からなかったこと」「さらに調べたいこと」などを書く。自分の学びをメタ認知することは、次の学びへの意欲につながる。



※市川名誉教授の提供資料と取材を基に編集部で作成。